

漱石「送籍」の真実

Junko Higasa 2016.7.16

『吾輩は猫である』第六章に「送籍」という男が『一夜』を書いたという話が出てくる。これは漱石が北海道へ籍を送ることによって徴兵を回避したという告白である。これについては漱石自身が戦争へ行きたくないために送籍したというのが多くの人の見方である。しかし果たしてそうだろうか。籍を送る手続きをしたのは家族であると言われる。即ち、病弱な兄に替わって夏目家の家督を継ぐ必要のあった金之助（漱石）は、本人の意思ではなく、家族の意向で送籍されたと思われる。

従って先の告白は「自動的に送籍した自分の勇気のなさ」を表すのではなく、「他動的送籍に従った自分の勇気のなさ」を表すと解釈すべきではなかろうか。能動的であれ、受動的であれ、結果として徴兵を回避したことに変わりはないという、とりわけ従軍した子規に対する慙愧の念が、猫の「吾輩」に「自分も日本の猫であるから戦う気概は充分にあるが、戦争には向いていない」と言わせているのだろう。

これは「子規が死んでしまった」のではなく「子規を殺してしまった」という表現にも当てはまる。

漱石と子規は、『こころ』の先生と K のようでもある。共に文学の道を志した二人。自分の意志を貫いて死んでしまった子規と、「先生」と呼ばれて生きている漱石。能動的死と受動的生。子規だけが戦い、自分は戦わなかったという思いの告白に見える。